

『平家物語』 墨俣川合戦譚について

山上 登志美

(一)

平清盛が亡くなった翌月の治承五年三月、平家軍は美濃国墨俣川の合戦において、源行家・義円を大將軍とする源氏軍に勝利し、更に熱田、矢作と退却する源氏を追い撃ちし、二度の勝利をおさめた。衰運の平家の底力を見せ付けたかのような、この墨俣川合戦は、もちろん『平家物語』にも描かれている。しかしその内容は諸本によってかなりの異同が見られ、平家軍の大將軍の名さえ、諸本によって違っているのは、周知のところである。小稿では『平家物語』墨俣川合戦譚をとりあげ、主に延慶本、覚一本、四部合戦状本の三本が描く墨俣川合戦を比較し、それぞれが伝える合戦とその性格について考えてみる。

(二)

次の表は、延慶本の墨俣川合戦に関わる記事を基に、覚一本、四部本、そして参考のために『玉葉』の記事とを比較したものである。(○は同じ記事内容が見えることを、×は同じ記事を持たないことを、△は異文が見えることを、それぞれあらわす。なお、墨俣川合戦に関連しない記事は省略している。)

	延慶本	覚一本	四部本	玉葉
1	知盛ら東国へ出陣 (治承4・12・3)	○ (12・23)	○ (12・2)	○ (12・2)
2	尾張から早馬到着	○	○	×

10	9	8	7	6	5	4	3	(治承5・1・28)
御公義門討死	悪王佐全運武勇談	源氏軍、陣取 (3・11)	平家軍、墨俣に陣取 (2・28)	源氏軍、鎌倉を出発 (2・7)	重衡、維盛東国へ 出陣 (2・15)	×	知盛ら美濃蒲倉に て行家と合戦勝利 する。 (治承5・1)	(3・10)
△	×	△	△	×	△	×	×	(1・28)
×	×	○ (3・11)	×	×	○ (閏2・15)	知盛、病によ り帰京 (2・12)	×	(1・20)
		△	墨俣川合戦 (3・10)	×	○ (閏2・15)	○		

14	13	12	11	(円全)	(御厨義慶)
平家軍退却、帰京	行家、然田、矢作 を落ちる	泉勢敗退	行家敗戦		
△	△	×	○		
△	△	×	○		

まず、最も詳細な延慶本を中心に覚一本と比較検討していく。長門本も内容的には、ほぼ同じなのであるが、二箇所延慶本との相違が見られる。ひとつは平家軍の軍勢の数である。延慶本では、墨俣川に対陣した平家の軍勢の数を、二万余騎とし、長門本では七千余騎とする。(覚一本は三万余騎、四部本は六千余騎とする。)ふたつめは、延慶本のみが持つ次の文章(表6)である。

サテモ二月七日、東国ノ大勢、相模国鎌倉ヲ立ト聞ユ。平家驍テ、四国九国ノ武士共ヲ召集、東国へ被向ベカリケル程ニ、西国ノ勢遅々シケル間、源氏軍兵ハ美乃尾張マデ貴上ル。又信乃国帯刀先生義賢ガ子ニ木曾冠者義仲、十郎藏人行家二人、北陸道ヲ塞ト聞ユ。カ、リシ間、平家イト、行先狭ソ被思ケル。

延慶本では、「興福寺常楽会被行事」の後、長門本にはない鎮西の逆賊の追討を命じる下文を載せ、その後、右の文章（表6）、そして表の7の記事平家軍が墨俣川に陣取る様子を載せる。長門本では、「興福寺常楽会被行事」の後、すぐに平家軍の陣取に移る。延慶本のみに見える右の文章であるが、十郎蔵人行家が義仲とともに北陸道を塞いだとしているものの、このあと平家軍の陣取を書いたすぐ後に、「三月十一日アケボノ二、東ノ河原二武者千騎計馳来。即東ノハタニ陣ヲ取。是ハ兵衛佐二ハ叔父、十郎蔵人行家也」と墨俣川合戦に移っており、行家は北陸道を義仲と塞いでいたわけではない。延慶本には行家の動きに矛盾が見えるのである。

次に表9の「悪土佐全運の武勇談」について見てみよう。この逸話の内容は以下のとおりである。源氏の陣屋に一人の乞食法師が物乞いにやってきたのを、怪しく思つて捕らえいましめ、拷問しようとする、乞食は縄を引きちぎつて逃げてしまう。河へ飛び込んだので、源氏の兵たちが大勢追い掛け、矢を射たところ、乞食は矢が飛んでくる時は水の中へもぐり、射やむと浮き上がる。浮き沈みしながら平家の船にたどりつく。しばらくするとその乞食法師は、鎧を着て馬に乗り、河岸に立ち対岸の源氏勢に向かつて、「ニゲテ名乗ハオカシケレドモ、只今被

取テ河ヲ越タリツルハ、此法師。カク申ハ、主馬判官盛国方孫、越中前司盛俊方末子、近江国石山法師ニ悪土佐全運」と名乗った。この全運の話は、注意して読んでみると、次の10卿公義円（延慶本では円全とする）が抜け駆けして討死する話の間に割って入ったような体裁となっている。延慶本から問題の箇所を次に抜き出してみる。

平家ハ西鯨^ニ二万余騎、源氏ハ東ノ河原ニ二千余騎、源平河ヲ隔テ陣ヲ取。明ル卯剋ニハ東西ノ矢合ト開ユ。行家ト円全ト、互ニ先ヲ心ニ懸タリ。同巳剋計ニ、墨染ノ衣ニ槍笠頸ニ懸タル乞食法師一人、源氏ノ陣屋ニ来テ、（中略）卿公ハ、「平家ニケゴ（警固）見ヘテ、一定渡サレナムズ。十郎蔵人ニ先ヲ懸ラレテハ、兵衛佐ニ可面合カ」ト思ケレバ、

中略した部分は、先に紹介した全運の武勇談であり、波線部bは「平家の者（全運）に警護を見られたのだから、きっと平家軍は河を渡って攻め寄せてくるだろう」という意味にとれる。平家が先手をうって河を渡って攻め寄せてくるのなら、後の波線部c「十郎蔵人ニ先ヲ懸ラレテハ、兵衛佐ニ可面合カ」がいきてはこない。波線部cは、「行家ト円全ト、互ニ先ヲ心ニ懸タリ。卿公ハ「十郎蔵人ニ先ヲ懸ラレテハ、兵衛佐ニ可面

合カ」ト思ケレバ」と、波線部 a に続ければ、意味がしっくりおさまり、延慶本や長門本が伝える石山法師全運の武勇談は、行家と脚公義円の先駆け争いの話の間に、後から割り込ませた真跡が認められるのである。『源平盛衰記』には、この全運の武勇談はなく、「行家と義円と互に先を心に懸けたり。脚公義円は十郎藏人に先を駆けられては兵衛佐に面を合すべきかと思ひて」と義円の討死話が続いていくことから、全運武勇談の後の増補の可能性が考えられる。

この全運武勇談から思い出されるのは、有名な屋島軍での悪七兵衛景清の鍔引きである。景清は延慶本の鍔引きの中で、「平家ノ御方二越中前司盛俊ガ次男、上総悪七兵衛景清」と名乗っており、資料は見当たらないが、全運も景清も、鬼神と呼ばれるほどの勇士盛俊の息子というわけである。鍔引きの中で景清は、丹生屋十郎の鍔を引ききつた後から、名乗って陣の中に退いたとする。すべての武功談が終わってから名乗りをさせる、という種あかしのような名乗りの設定は、一風変わっており、鍔引きと全運武勇談に通じる技法である。人並みはずれた武勇の程を、誰とは知らせずに詳しく描いておいてから紹介する技法は、その逸話の主人公の勇猛さを強調するのに役立っているし、それとともに読み手の興味を増加させるのにも役立っている。

る。延慶本が盛俊の子とする全運、景清の名乗りの設定が同じなのは、延慶本が盛俊の武勇に対して、特別な畏怖の念を持っていたからであろうか。脚公義円討死の逸話については、『平治物語』も交えて、後で詳しく検討することにした。

さて次に表の14、平家軍退却・帰洛の記事を考えてみたい。墨俣川合戦に勝ちながら、なぜ平家が退却したのか、大まかに分けて語り本系と読み本系では伝える原因が違う。まず、延慶本、覚一本、四部本の各本が、それぞれ誰を平家軍の大將軍としているかを押さえておく。

延慶本：知盛、重衡、維盛　　覚一本：知盛、清経、有盛
四部本：重衡、維盛

覚一本では、平家は墨俣川合戦の勝ち戦の後、行家が退いた矢作川も落とし、続いて敗退する源氏軍を続いて追いつちすればよかったのに、知盛の病によって帰洛を余儀なくされる、とする。

今度もわづかに一陣を破るといへ共、残党をせめねば、しだいしたる事なきが如し。平家は、去々年小松のおと、薨せられぬ。今年又入道相国うせ給ひぬ。運命の末になる事あらはなりしかば、年来恩顧の輩の外は、随ひつく物なかりけり。東国には草も木もみな源氏にぞなびきける。(覚)

せつかくの勝ち戦でありながら、知盛の病のため攻撃を中途半端であきらめるをえず、「運命の末」にある平家を強調する文章を添えている。このあたりの覚一本の記述が史実の混同と捏造をもって書かれていることは、これまで指摘されつつけてきたところである。もう一度、表をもとに、史実との差を確認してみよう。

表1 治承四年十二月二日、知盛は追討使として一族の者を率い、近江国へ出陣し反乱軍を攻めている(『玉葉』同日条、及び九日条)。翌治承五年正月二十日、美濃国蒲倉城に籠る逆賊を討伐するが(表3)、官軍にも数十人の負傷者がでたという(同書、同月二十五日条)。その後、二月一日条には、行家が数万の軍兵を率いて尾張国まで押し寄せたが、平家軍は疲れのため、ただちに戦うことが叶わなかった旨を伝える記事が見える。知盛が病気のため帰洛したのは、二月十二日のことである(表4)。知盛が変わって宗盛が下向しようとしたが(同書、二月二十六日条)、清盛の病によって出発がとりやめになり、清盛の病死後、閏二月十五日に、院の下文を帯した重衡が東国に出発している(同書、同日条、表5)。

この間の出来事を延慶本は、次のように書いている。

治承四年十二月三日、知盛以下七千余騎が東国へ発向し(表1)、美濃、尾張国を平定。南都炎上、高倉院崩御、木曾義仲の成長を挟んで、翌五年正月二十八日、尾張国の目代が早馬で源氏軍が攻寄せてきた旨を知らせている(表2)。その後、二十九日の宗盛が近国惣官に任せられた、短い文章の後、日付はないが、行家と知盛率いる平家軍が、美濃国蒲倉で合戦し、平家軍が勝利、近江、美濃、尾張の三か国を従え、五千余騎になって、墨俣川に着いたという記事をお載せる(表3)。延慶本はこの後、知盛が病気のため帰洛した記事は持たず、宗盛の東国下向が決定するが、清盛の病により中止となったことだけを書いている。清盛の死の後、「(二月)十五日、頭中将重衡、権亮少将維盛、数万騎ノ軍兵ヲ相具テ、東国へ発向ス」とあり知盛の名は見当たらない。延慶本の書き方からすると、治承四年十二月に都を出て、東国に向かった知盛は、清盛の死に目に会うこともなく、翌五年三月の墨俣川合戦まで、ずっと東国に出陣したまま、ということになる。

この誤りと不自然さを利用し、本当は平家軍の勝利に終わったはずの墨俣川合戦を、「平家の運命の末」に仕立てあげたのが、覚一本である。覚一本も治承四年十二月二十三日に、知盛、忠度が発向し、近江源氏を追討した後、美濃、尾張に向かった

という記事を載せる。その後、寛一本は、衰運に向かい続ける平家を描くため、延慶本に見える美濃蒲倉での勝戦を略し、清盛死去、五条大納言那桐の死去や後白河法皇の法住寺殿への御幸の後、三月十日に尾張の目代から早馬が遣わされ、源氏が尾張国まで責め上ったとの急報が都に知らされて、平家は知盛らを東国へ派遣するのである。寛一本は二月の知盛の病による帰京を書かずに、尾張からの知らせによって、再び知盛を東国へ派遣させる。二度目の知盛出陣から、延慶本と違って知盛がいったん京に戻ったことを承知させ、墨俣川合戦に勝ちながら行家らを取り逃がし、はかばかしい戦果をあげられなのまま、病に犯された知盛が帰京する、という設定に変えているのである。つまり、寛一本は、延慶本が書かない知盛の病による帰洛を、墨俣川合戦の後に書き加え、平家の衰運を強調することに成功しているのである。

そのかわりに寛一本は、延慶本が平家軍退却の原因とする、行家のはかりごとを載せていない。延慶本では、三河国矢作をも平家軍に落とされた行家が、雑色三人に旅装束をさせて平家の陣へ行かせ、関東から頼朝が大勢で責め上りつつある、と嘘の証言をさせ、それを聞いた平家は、大軍に囲まれてはかなわぬ、と急ぎ都へ帰りのぼった、とする。佐倉由泰氏は、いかに

も行家らしいこの逸話について、「延慶本等が、捉えどころがなく、いわく言いがたい人物として、行家を物語的に形象していることは確かである」と指摘されている。⁴¹延慶本の行家の計略からも平家の積極性のなさや軟弱さは感じとられるが、延慶本が描く平家の敗走は、行家の巧妙な技を描くためのもので、寛一本のように源氏からのほたらきかけもないのに、大事な時の大將の病気による敗走という、運の悪さを強調するものとは、まったく違った視点による描き方である。

延慶本の墨俣川合戦譚は、行家の動きの矛盾、行家と義円の先陣争いの間に割っていった痕跡のある墨土佐全運の武勇談など、墨俣川合戦にまつわる説話を、未整理のまま放り込んだものといえよう。

(三)

次に、四部本の墨俣川合戦譚にうつりたい。四部本は簡略な記述と正確な編年記事を持つ本である。この墨俣川合戦でも、表に見るように、その傾向は顕著である。四部本は、治承五年二月の知盛の病による帰洛を正確に書き入れ、全運の武勇談や義円の討死までも記さないと、史実主義の姿勢をとって、い

る。そして他の説み本系の諸本が伝える、平家軍退却の要因となつた行家の計略については、次のように書いてある。

平家は洲保を渡りて、十郎藏人に迫りければ、此彼支へられけれども叶はず、参河国矢作河の東の岸に付く。額田郡の兵共を驅り集めて防ぎけれども、叶ふべくも無かりければ、平家勝つに乗りて、東国へ迫め下らんと為れども、「兵衛佐之を聞きて、安田三郎義定を以て、遠江の橋本を堅めて相待つ由聞こえける上、東国より大勢上る」と披露してこそ、平家は亦取る物も取り敢へず引き退き、廿五日に京へぞ上りける。

延慶本などでは先に見てきたように、安田義定の名はでてこない。安田義定が橋本を堅めて侍っている、とするのは、この四部本のみである。ここで注目したいのは、『吾妻鏡』治承五年二月二十七日条の次の記事である。

安田三郎義定が飛脚、遠江国より鎌倉に参上す。申して云はく、平氏の大將軍中宮亮通盛朝臣・左少将維盛朝臣・薩摩守忠盛朝臣等、数千騎を相率して下向し、すでに尾張国に至る。重ねて軍士を差して、防戦の儀を構へらるべきかと云々。

富士川の合戦直後の治承四年十月二十一日に、安田義定は遠

江国の守護に任ぜられており、この義定の求めに応じた頼朝は、翌日の二十八日には早くも和田義盛・岡部忠綱らの軍勢を遠江国に派遣している。四部本が、平家軍退却の理由とした、義定が遠江の橋本を堅め、大軍が東国から責めてくる、というのは、決して作り話ではなく、明らかに歴史事実に基づいた改変なのである。かつて高山利弘氏が指摘なさった、四部本の「歴史事実が物語たりえている」性格が、この墨俣川合戦譚においても認められるのである。できるだけ本文を略述しながらも、当時の遠江国守護安田義定の名をわざわざ書き込んでいる四部本には、延慶本が伝えるような、いかにも行家の計略にありがちな物語性の濃い逸話を、少しでも歴史事実に近い近付けようという意図が見受けられる。延慶本がとりこぼし、覚一本が故意に時期をずらせた知盛の病による帰洛を史実とおりの箇所書き入れたことから、四部本の史実主義の姿勢が説くとれる。後世の『保曆間記』や『神明鏡』が、四部本に近い本文を持つ『平家物語』を定本として扱い、依拠して成立したのは、現在考えられるよりも四部本が広く流布していたであろうこと、それとともに『平家物語』諸本のうちで四部本を、もっとも史料としての価値が高い「歴史書」と、『保曆間記』や『神明鏡』の作者が認識していたためなのである。

(四)

最後に、頼朝の弟、義門討死の話について述べておきたい。前表のとおり、覚一本では義門の討死について、「卿公義門はふか入してうたれにけり」とだけ述べ、義門がどういいういきさつで討死したのか、全く触れていない。また義門の紹介についても、「源氏の方には、大將軍十郎藏人行家、兵衛佐のおとゝ卿公義門」としか書かない。覚一本にとって墨俣川合戦は、平家の衰運を描くための話であり、視点が源氏方にうつり、それも大將軍の討死という平家方に有利な義門の最期は、極力避けたかったのであろう。四部本になると、「故左馬頭が息男卿房義慶」が行家とともに墨俣に陣取ったということだけで、彼の討死についてさえも書いていない。一方延慶本では、次のように義門を紹介する。

三月十一日アケボノニ、東ノ河原ニ武者千騎計馳来。即東ノハタニ陣ヲ取。是ハ兵衛佐ニハ叔父、十郎藏人行家也。又千騎計来。是ハ兵衛佐弟、鳥羽ノ卿公円全ト云僧也。常葉腹ノ子、九郎一腹一生ノ兄也。十郎藏人ニカヲ付ヨトテ、兵衛佐千騎ノ勢ヲ付テ差上タリケル也。十郎藏人カ陣ニ町

隔テ陣ヲ取。

ここでは、延慶本が波線部のように「常葉腹ノ子、九郎一腹一生ノ兄也」と義門を紹介している。この文章の下敷きとなっているのは、やはり常葉伝説であろう。常葉伝説の影響を受けているからこそ、このような義門の紹介ができるのである。

さて、延慶本の中で義門は行家を出し抜こうと、ただ一騎で河を渡り、抜け駆けしようとするが、平家の夜廻りの兵にみつかってしまい、

円全少シモサワガズ、「御方ノ者。馬ノ尾ヒヤシ候」ト答タリ。「御方ナラバ、甲ヲヌキテ名乗」ト云ケレバ、馬ニヒタト乗テ、陸へ打上り、「兵衛佐頼朝ガ弟、鳥羽卿公円全ト云者ナリ」ト名乗テ、十騎者共ガ中へ打入ル。サトアケテソ通ケル。円全三騎打取テ、二騎ニ手負セテ、残五騎ニ取籠ラレテ討レニケリ。

と結局討死してしまう。墨俣川合戦における義門討死の有様は、『平家物語』だけでなく、『平治物語』にも描かれている。たとえば吉熊本系本文を持つ学智院本『平治物語』下巻「頼朝義兵を挙げらるる事并平家退治の事」に書かれている義門（学智院本の中では、八条の卿坊円全とする）は、「親の敵の平家を河のむかひにをきて、今夜、合戦をせずして、人の命のしりが

たさは、夜の間に、たゞ死しなば、後生のさはりともなりぬべし。暇申で」と言つて、五十余騎で河を渡り、敵陣に攻め込み、重衡・教経らの中に取り囲まれて討死したとする。学習院本の義門討死の様子は、『平家物語』のどの本にも一致しない。日下力氏は、『平家』諸本でも、延慶本が抜け駆けの功名をわらうて失敗したとするなど、『平治』と一致するものはなく、かつ、これほどいさぎよい人物に描かれることはない。先の希義の場合と等しく、理想化されたものであろう」と指摘されている。

ところが、比較的新しい本文を持つとされる京都大学付属図書館蔵本『平治物語』の義門討死の経緯は、学習院本とはかなり趣を異にしている。

つきに乙若は十二歳より鳥羽宮に候けり。是も法師に成て卿の公とそ申ける。此人は頼朝むほんの時、東国に逃下、養和元年に十郎藏人行家にくして、尾張国洲候川の東にむかひたりしか、平家の軍兵のししたのはたに宿したりけるを、夜討せんとてひそかに西の地へわたりける程に、さとられとうたれにけり。

日下力氏は、京図本の義門討死記事について、『平治』の京図本・流布本の後日譚部では、円濟（義門）が深入りして討死

したとのみ記されており、これは『平家』の語り本系と一致する。『平家』の影響下に『平治』の側で改変したのであろう」とされるが、京図本の波線部を施している箇所と延慶本の『平家ハ西鯉三二万余騎、源氏ハ東ノ河原三二千余騎』、また、京図本の義門が夜討をしようとしてひそかに墨俣川を渡った点は、延慶本の義門が抜けがけしようとして、たつた一騎でひそかに墨俣川を渡った点に一致する。覚一本では同じ箇所は、「尾張川をなかにへだてて、源平両方に陣をとる」とし、義門も「深入り」して討たれた、とあり、「夜討ち」をしたとは書いていない。

京図本は語り本系ではなく、おそらく延慶本のような読み本系本文を持つ『平家物語』の影響を受けているのであろう。ただし、『平家物語』諸本、および『平治物語』の中でも、義門はさまざまな名が伝えられている。討死の有様も違っている。たとえば、八坂本『平家物語』では、覚一本ともかなり違っており、義門は平家の陣の様子を見ようと、主従七騎で川を渡ったものの、盛俊に見つかり、討死したと覚一本に比べてかなり詳しく、また、延慶本に近付いた内容となっていることに気づく。義門討死談の情報源は複数あったと考えられるのである。

(五)

以上、墨俣川合戦源について、延慶本・覚一本・四部本を中心に検討してきた。雑多な伝承を未整理のまま放り込み、話のつなぎ目と矛盾が垣間見られる延慶本。平家の運のきわめを描く覚一本。物語性の濃い話に、歴史的な裏付けを付け加え、史実に近づこうとする四部本。墨俣川合戦は『平家物語』の中ではそれほど知られた合戦ではなかったため、各本の性格を十分に反映させながら、改変されていたのである。

- 注1 以下、延慶本の引用は、勉誠社『延慶本平家物語 本文篇上・下』による。
- 2 以下、覚一本の引用は、岩波日本古典文学大系本による。
- 3 『平家物語』における源行家」(信州大学人文学科人文科学論集 文化コミュニケーション学科編)30 一九九六年三月)
- 4 以下、四部本の引用は、高山利弘氏編著『四部合戦状 本平家物語』(有精堂、一九九五年三月)による。
- 5 引用は、『全訳 吾妻鏡 一』(新人物往来社)による。
- 6 「四部本平家物語の方法―巻五「早馬」をめぐる―」(千葉大学文学部国語国文学会『語文論叢』第14号 一九八六年九月)
- 7 佐伯真一氏は『保暦間記』が利用した『平家物語』から、四部本・盛衰記の共通祖本の姿をうかがえる」としておられる。(『平家物語起源』第九章『保暦間記』と四部本・盛衰記共通祖本の想定 一九九六年九月 若草書房)
- 8 引用は、岩波新日本古典文学大系本による。
- 9 『平治物語の成立と展開』「前篇平治物語の成立 第四章 改変増補の過程 第三節 後日譚部の性格」(一九九七年六月汲古書院)
- 10 引用は、笠原治氏編『平治物語研究校本篇』(一九八一年六月 おうふう)による。
- 11 注9 同書「後篇平治物語の展開 第二章『平家物語』と『平治物語』 第一節 交渉関係の吟味」の注による。